

働き方が人生に及ぼす影響

1240539 山下小夏

指導教員 小谷浩示

研究背景

長寿化がすすむ現代社会にて労働年数の増加は必至であり、どう働くかは人生に重大な影響を与える。価値観の変化やテクノロジーの発展、パンデミック等により働き方は多様性を増しており、働き方（特に職業生活と私生活の境界線）のあるべき姿は今や、人によって、職種によって異なると考えられる。しかしそのことを踏まえた研究は見当たらない。

研究目的

本研究は、人々が思う働き方の理想と現実が彼（女）らの人生の充実度、特に対人関係の充足を享受する力や休暇の需要と如何なる関連性を有するのか明らかにすることを目的とした。

研究方法

働き方について、職業生活と私生活の分け方に着目し「ワーク・ライフ・バランス（分離）型」と「ワーク・アズ・ライフ（融合）型」に分類し、1,508 名を対象にアンケート調査・データ収集した後、統計解析を行った。

分析結果

理想と現実の働き方が一致している人々は、両者が一致していない人々に比して、対人関係の充足を享受する力が強く、追加的に需要する有給休暇日数は少ないことが分かった。特に融合型で一致している人々はその傾向が顕著であった。

考察・結論

充足のためには、「自分にとってどのような働き方が理想なのか」を各人が早い段階から都度考えること、そして社会全体として、人々の働き方の理想と現実を一致させられる仕組みづくりを進めるべきである。また、今後の働き方のあるべき姿を検討するにあたって、余暇時間の確保以上に一人一人の働き方の理想と現実を一致させられる仕組みづくりが重要である可能性が示唆された。